

## 現代社会における父親と子ども

—コミュニケーションからみた父子関係—

武田京子\*

(1993年6月30日受理)

### はじめに

「現代の日本の父親は、さまざまな問題点をもっている。これが父親自身や夫婦関係の枠内にとどまるものならば、それほど深刻に考えなくてもよいのかもしれない。しかし、父親の問題は、子どもの行動に少なからぬ影響を与えている。子どもの望ましい発達という観点から父親の問題を考えると、深刻にならざるを得ないのではないか<sup>1)</sup>。」この文章は最近書かれたものではなく、昭和50年代に書かれたものである。

現代社会が「父親なき社会」とであると指摘したのはドイツの精神分析学者ミッチャリーヒである。昭和22年の民法改正により、「家父長制的家族制度」は法律的には廃止され、伝統的な価値観に支えられた父親像は崩壊した。さらに、産業構造の変化に伴い、子どもに父親自身の働く姿を見せる機会を失い、給与の口座振込が一般化することによって父親の存在価値や権威を失ったといわれている。戦前の日本における父親像は、封建社会を維持するために有効であったいわば見せかけの権威であった。日本の父親は、西欧のキリスト教精神に支えられた父性原理に基づく「強い父」とは異なるものであり、民法改正によって支えを失い影の薄い存在になってしまったのである。その結果、特に男児は同一化の対象を失い、うまく社会化できないなど心理的発達上問題が生じてきている。

一方、現代家族の特徴ともいえる核家族化・小家族化の進行、共働き家族の増加によって育児をはじめとする家事活動に、父親が積極的に参加する機会も増加している。これを父親の母親化現象(限りなく母親に近い父親の増加)ととらえ、家庭内の性別役割分担が不明確になることが子どもの発達上問題があるのではないかと懸念するむきもある。

子どもの健やかな発達における両親の役割は重要なものであるが、従来、母子関係に焦点をおいた調査研究が主流であって、父子関係に焦点をあて、子どもの社会化における父親の役割と課題を明らかにしようとするものは、詫摩、総務庁、くもん子ども研究所などに限られている。

そこで、本研究では、日常生活において父親と子どもがどのように接触の機会を持っているか、父子関係の実際と意識をあきらかにし、先行研究による父親像との比較をすることによって変化の様子を把握しようとするものである。

\*岩手大学教育学部

### 今までの父子関係の研究から

#### (1) 詫摩武俊「父と子のあいだ」<sup>2)</sup>(1969)

幼稚園から小学校2、3年までの子どもを持つ父親からのアンケートの回答526通を基礎資料として以下の項目について分析をしている。

- ①父親と子どもとの接触（休日の外出の頻度・夕食を一緒にする頻度・会話の頻度・子どもの日常生活に関する関心度・育児参加の度合い）
- ②子どものしつけ（どんなときに叱るか・どんな子どもに育ててほしいか）
- ③父親自身の認知像（子どもがどう思っているか・世間一般との比較）
- ④子どもの進学について
- ⑤自分自身の父親と比較した場合の自己評価

（結果）①全体の三分の二以上の父親は月一回以上子どもと外出をし、半数が週の半分一緒に夕食をとっている。子どもともよく話し、子どものことはよく知っているつもりでも改めて質問されると案外知らないことがある。一緒にお風呂に入ったり抱いたりするが、おむつの取り替えはあまり行われていない。

②大都市では男児、地方では女児に対して厳しい。叱られる内容は年齢によって異なる。形式的な礼儀（挨拶をしない）や甘えることについて叱られることが少なくなっている。将来は活発・積極的・誠実・社交性・自主性のある子、苦勞・努力するよりも軽快に・スマートにやる子どもになることを望んでいる。

③忙しくはしているが、何でもよく知っていて、子どもから頼りにされているのが世間一般の父親で自分もその一員であると考えている。

④男児には90パーセント以上が大学卒業以上の学歴をつけたいと望んでいる。女児には半数近くが大学まで、高校までは20パーセント、義務教育までは0である。

⑤全体的傾向では、自分のほうがやさしく・理解が深く・子どもとよく遊び・勉強もよくみる・体罰を加えることは少なく・子どもから頼られていると考えている。しかし、自分のほうが厳しいと思っている父親が約四分の一存在し、タイプは多様化しており概括化することは危険である。

#### (2) 総務庁青少年対策本部編「日本の父親と子供」—アメリカ・西ドイツとの比較<sup>3)</sup>(1987)

日本・アメリカ・西ドイツの父親と子どもの生活実態・接触の実態・感情面での交流及び家庭における父親の存在や父親の教育観などを調査し、比較検討することによって父子関係の現状と問題点を的確に把握し、今後の青少年健全育成のために役立てようと、日本・アメリカ・西ドイツの10歳から15歳までの子どもと父親各1,000サンプル回収を原則として調査をおこなった。

調査結果から日本の父親は、以下のようになる。

##### ①父親と子どもとの行動面での関わり

\*平均接触時間・・・・・・・・・・平日36分、休日1時間32分。どちらもアメリカ・西ドイツより短い。

\*接触頻度・・・・・・・・・・約半数(54.4%)が毎日おしゃべりしたり朝食を一緒にとっている。

アメリカ・西ドイツに比べると勉強を見たりスポーツや掃除をするのは少ない。

- \*積極的な働きかけ・・・・・・・・アメリカ・西ドイツより少ない。(47%)
- \*接し方・・・・・・・・大人扱いしたり、意見が食い違ったときによく聞こうとすることが少ない。

#### ②父親と子どもとの心理面での関わり

- \*感情面・・・・・・・・子どものことはよく考えている父親が多い反面、子どもの考えていることがよくわからないという父親も多い。
- \*子どもへの期待・・・・・・・・期待する事項は「思いやりのある」「責任感のある」「ねばり強く頑張る」で、順位は異なるが項目はほぼ同じである。

#### ③家庭における父親の存在

- \*父親自身のイメージ・・・・・・・・仕事熱心(51.9%)優しい(31.7%)厳しい(30.7%)おこりっぽい(29.5%)。子どもから尊敬されていると思っている父親は少ない。
- \*家庭教育の分担・・・・・・・・日本では母親が主体。アメリカは父母両方。西ドイツはアメリカと日本の中間。日本の父親の関与度の高いのは、社会の仕組み・道徳的内容・お金の価値・礼儀作法を教えるなど。

#### ④家庭外での父親の活動

- \*学校や地域活動への参加・・・・「地域の大人の協力が必要」と考えているものが多いが実際に活動に参加する父親は少ない。

#### (3)くもん子ども研究所「父と子のコミュニケーション」(1991)<sup>4)</sup>

くもん子ども研究所は「子どもは父親とのコミュニケーションによって、社会性豊かな人間に成長する」という仮説をたて、検証するために全国の子どもの調査をおこなった。小学校5年生1,158名、中学校2年生709名、高校2年生449名で、地域は札幌・東京・金沢・大阪・高松・福岡とその周辺である。父親の職業は、会社員58%、公務員・教員12%、自営業21%、農林漁業1.4%である。

父親に対する子どもの「関心度」「理解度」「共感度」「対話の状況」を判断する質問を設定し、父と子の「コミュニケーション度」を測定した。コミュニケーション度と子どもの社会性獲得状況の関係を明らかにするために「規範性」「責任感」「公共心」に関する質問を行っている。

父親とのコミュニケーション度と子どもの社会性獲得度は相関し、しかも学年の低い程その傾向は顕著であった。従来は低年齢の内は母親の影響をもっぱら受けると考えられていたが、父親も大きな影響を与えていることが確認された。子どもとのコミュニケーションのうまくとれている父親の具体的な姿を子どもたちは、「家族にやさしく、話しをよく聞いてくれる父親<やさしい・パートナー型>」「おしゃれで趣味が広く、楽しく生活している父親<はつらつ・生活エンジョイ型>」ととらえている。逆にコミュニケーションのとれていない子どもは、「厳しくて自分の考えで家族を引っ張っていく父親<厳しい・リーダー型>」「たくましくて、一生懸命に仕事に取り組んでいる父親<堅実・仕事重視型>」ととらえている。

## 今回の調査の概要

### (1)調査方法

1991年9月、岩手大学教育学部及び農学部卒業生の34歳から43歳の男性、各学部100名を無作為に抽出し、質問紙を郵送した。

回収後の有効回答率は48.0%。岩手県内居住者67.7%、県外居住者22.3%。両親・子どもの年齢、両親の職業、家族形態は表-Iの通り。

表-I 調査対象者の概要

#### ①父親の年齢 (平均37.8歳)

年齢	-35	36-40	41-
(%)	11.0	77.7	11.1

#### ②母親の年齢 (平均35.7歳)

年齢	-30	31-35	36-40	41-
(%)	4.0	37.8	33.7	5.2

#### ③両親の職業

	公務員	会社員	自営業	パートアルバイト	無職	その他
父親	77.8	18.2	0	0	0	4.0
母親	39.4	1.0	2.0	9.0	46.0	2.0

(%)

#### ④家族構成

核家族 (61.0%), 拡大家族 (38.1%), 無記入 (1.0%)

#### ⑤子どもの年齢

歳	0-5	6-10	11-15	16-
(%)	39.7	43.9	15.4	0.9

子どもの総数234名 (男児113名, 女児121名)  
平均年齢6.64歳

### (2)調査の内容及び分析方法

①父親像の把握 託摩(1969)の調査のうち子どもとの接触度・子どものしつけ・望んでいる子ども像・父親自身の認知像について、同じ質問をおこなった。

②父と子のコミュニケーション いくつかの質問の結果を点数化し、5つの群に分類し、職業・母親の就労・家族形態・叱り方・父親像・望んでいる子ども像・問題行動を起こした時の関与の仕方との関連の有無をみた。

## 結果及び考察

### (1)子どもとの接触度

①夕食を一緒にとる回数 全体の5割以上がほとんど毎日一緒に夕食をとっている。

2日以下が26.2%となっている。今回の調査対象の7割が公務員、しかも教員のためであると考えられる。夕食時に会話をしながら(64.0%)、テレビを見ながら(35.0%)となっている。休日には子どもと遊びに行かない父親はほとんどない。たびたび出かけたり遊んだりしている。20年前と比べてレジャー施設が充実してきたことなど別の理由が考えられるが、今回の対象となった父親は、子どもとよく触れ合う機会を持っている(表-II-1, 2)。

表-II-1 休日の過ごし方(外出・遊ぶ)

回数	今回	詫摩
たびたび	51.0	29.7
ときどき(月に約1回)	40.0	33.6
たまに(年に数回)	9.0	26.7
ほとんどない(年に1, 2回)	0	8.5
まったくない	0	1.7

表-II-2 夕食を一緒にとる頻度

今回の調査		詫摩氏調査	
毎日	32.3	6~7日	46.1
週に5, 6日	23.2		
週に3, 4日	18.2	3~5日	37.5
週に1, 2日	24.2	2日以下	16.5
ほとんどない	2.0		(%)

(%)

②子どものしつけ(表-III)

表-III 子どもを叱る理由(複数回答)

人が嫌がることをしたとき	70.7	☆	夜遅くまでテレビを見ているとき	16.2	↓
嘘をついたとき	52.5	↑	きょうだいげんかをしたとき	46.5	↑
挨拶をしないとき	18.2	↑	だだをこねるとき	39.4	☆
決められている手伝いをしないとき	23.2	↓	親の言うことを聞かないとき	52.5	☆
勉強をしないとき	12.1	↓	言葉遣いが悪いとき	39.4	☆
テスト・成績が悪かったとき	3.3	☆	家の中で騒ぐとき	22.2	-
人に迷惑をかけたとき	62.6	☆	食事中にふざけるとき	28.3	☆
食べ物の好き嫌いをしたとき	23.2	↓	朝なかなか起きないとき	8.9	☆

(%)

↑ 詫摩氏の調査より増加  
↓ " 減少  
- 変化無し  
☆ 新しい項目

③望んでいる子ども像(図-I, II, 表-IV) 対照的な性格の子どもを対にしてどちらの子どもになってほしいか選択させた。全体的な傾向としては、父親は「元気がよく・自分から積極的にものごとに取り組み・集中力があり・外で遊ぶことが好きな子」になることを望んでいるのは、詫摩氏の調査時と同様である。特に「外で遊ぶことが好きな子」を選択した割合が高くなっている。その背景には、テレビやファミコンなどの流行や遊び仲間や遊び場の減少

によって、外で遊ばない子どもが増加することに父親が危機感をもっているからではないだろうか。「本をよく読む子」を望む割合が低くなっているのもその裏付けになっているといえるだろう。また、「ひとつのことをじっくりやる子」「我慢強い子」になることを望んでいる。詫摩氏の調査では「苦労とか努力するとかいうことより、スマートにやること、つまり軽快さでもいうものを望んでいる。ひとつのことをじっくりやる子と要領よくやる子を組み合わせたら、後者を選ぶ親が非常に多いのではないかと考察していた。今回はそれを検証してみた結果、圧倒的に「一つをじっくりやる子」を選んだ父親が多い。「集中力の低下」「飽きっぽい」などと一般的にいわれることと無関係とは言えないだろう。

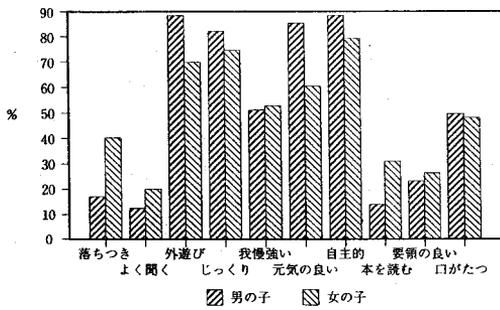


図-I 望む子ども像 (今回)

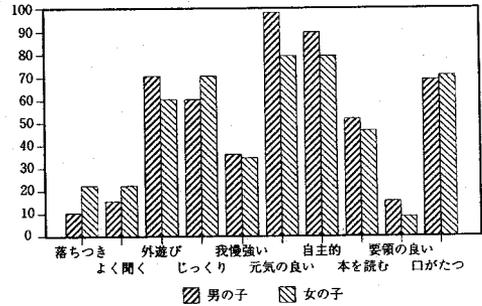


図-II 望む子ども像 (詫摩)

表-IV 望む子ども像 (今回)

(男の子)

16.25(%)	落ちつきのある子	元気のいい子	83.75(%)
11.25	いうことをよく聞く子	どんでんやる子	88.75
80.00	じっくりやる子	要領よくやる子	20.00
47.50	我慢強い子	口がたつ子	52.50
87.80	外遊びの好きな子	本をよく読む子	12.19

(女の子)

38.75(%)	落ちつきのある子	元気のいい子	61.25(%)
18.99	いうことをよく聞く子	どんでんやる子	81.33
73.56	じっくりやる子	要領よくやる子	26.43
48.10	我慢強い子	口がたつ子	51.89
69.87	外遊びの好きな子	本をよく読む子	30.12

性差を見てみると女の子には「元気の良い・外で遊ぶことの好きな子」よりも「落ちつきのある・本をよく読む子」を望む父親が多い。

④父親自身の認知像（表-V）

表-V 父親自身の認知像

何でも知っていていろいろ教えてくれる人	75.8(%)	↑
一生懸命仕事する人	55.5	—
よく叱り厳しい人	36.4	↑
たくましく頼りになる人	36.4	↓
話をよく聞いてくれる人	31.3	—
趣味を持ち生活を楽しむ人	18.2	☆
テレビばかり見ている人	18.2	↑
子どもの気持ちを理解してくれる人	13.1	↓
おしゃれでかっこいい人	5.1	☆

(注) ↑ 詫摩氏の調査より増加  
 ↓ 減少  
 — 変化無し  
 ☆ 新しい項目

「よく叱り厳しい人」は、1%水準で性差がみられた。男の子の父親は「厳しく・忙しい人」、女の子の父親は「よく話を聞いてくれる人」と自分自身をとらえているようである。

(2)父と子のコミュニケーション

①分類法 一緒に夕食をとる回数・夕食の雰囲気・休日の外出の頻度・子どもについてどのくらい知っているか・乳幼児期の育児関与度の結果を点数化し、5つの群に分類しコミュニケーションの良好な順にA群からE群とした。

②職業との関連 コミュニケーションのよくとれているA+B群とあまりとれていないD+E群では、職業との間に有意差がみられた。勤務時間が比較的一定し、残業の少ない公務員のほうがコミュニケーションは良好である。

③母親の就労形態・家族形態との関連 有意差は認められなかった。母親がフルタイム勤務の場合とパートタイム勤務の場合で比較すると、フルタイム勤務のほうが父子のコミュニケーションの度合いは良好である。フルタイム勤務の母親の家事労働軽減のために父親が家庭に関心を向け、積極的に関与する結果子どもとのコミュニケーションが良くなるのであろう。

A群は核家族が多いがE群でも核家族が多く家族形態との関連はいえない。

④叱る頻度・叱り方との関連 頻度との関係はみられなかったが、叱り方や理由に関係がみられた。コミュニケーションの良好な父親は子どもに社会性を身につけさせようとして叱るが、頭ごなしに叱るのではなく、子どもの立場になって話して聞かせるような方法をとっている。

(叱り方) 「話して諭す」良好群 (A・B) 66.7% > 40.6% 不良群 (D・E)  
 「感情的に怒鳴る」良好群 (A・B) 33.3% < 53.1% 不良群 (D・E)

(叱る理由) 「迷惑をかけたとき」 A群73% > 42% E群  
 「挨拶をしないとき」 A群36% > 8% E群

くもん子ども研究所の調査では父親とよくコミュニケーションがとれているかどうか、その一番表れやすい目安として「父親あるいは家族ときちんと挨拶するかどうか」をあげている。今回の調査で、コミュニケーションのよくとれている父親が子どもを叱る理由として「挨拶をしないとき」と答えた割合が高かったのはとても興味深い。

⑤父親像との関連 コミュニケーション良好群の父親は、子どもは自分のことを受容的で良いリーダーとなる父親とみていると考えている。

「たくましくて頼りになる」 A群 36% > 25% E群  
 「何でも知っていて教えてくれる」 A群 82% > 67% E群  
 「話しをよく聞いてくれる」 A群 55% > 17% E群  
 「気持ちを理解してくれる」 A群 36% > 0% E群 (P < 0.05)

コミュニケーションがとれていない群の父親は、子どもにとって自分は仕事が忙しいため、あまり子どもと接触する機会がなく、よく叱る厳しい存在であると考えている。

「よく叱り厳しい」 A群 27% < 50% E群  
 「一生懸命仕事をやる」 A群 9% < 67% E群 (P < 0.01)

⑥望む子ども像との関連 特に、男の子に対して、コミュニケーションがよくとれている父親は、「活発で自主性のある子ども」に育ててほしいと願っており、あまりとれていない父親は、「落ちつきのあるねばり強い子ども」に育ててほしいと願っている。

「元気のよい子」 A群 100% > 37% E群 (P < 0.05)  
 「自分でどんどんやる子」 A群 88% > 75% E群  
 「何でも要領よくやる子」 A群 50% > 25% E群  
 「言いたいことを言う子」 A群 63% > 37% E群

⑦子どもが問題行動を起こしたときの関与の仕方との関連 「子どもが他の子にけがをさせたとき、子どもが他の家の窓ガラスを壊したとき、どのように対処するか。」という設問に対して、A群は核家族で母親のフルタイム就業の割合が高いので、子どものしつけや教育を母親まかせにせず、父親は積極的に子育てに参加しようとしている。

「子どもが他の子にけがをさせたとき」  
 (子どもと自分が謝りに行く) A群 82% > 42% E群 (P < 0.05)  
 (母親と子どもに謝りに行かせる) A群 9% < 58% E群 (P < 0.01)  
 「子どもが他の家の窓ガラスを壊したとき」  
 (子どもと自分が謝りに行く) A群 64% > 33% E群  
 (母親と子どもに謝りに行かせる) A群 9% > 58% E群 (P < 0.01)

## まとめ

調査の対象の半数が教育学部出身者であることと調査に関心を持って回答をしてくれたとい

うことを併せて考えると、今回の調査は結果的に一般的な父親というより、教育熱心で、子どものことに関心のある、日頃から子どもとの接触の機会を多く持っている父親の姿をとらえることになった。

父子間のコミュニケーションの状況により群に分け比較考察を試みる際に、父親の職業・母親の就業の有無・家族形態の影響があるのではないかと予測した。忙しく時間的に不規則になりがちな会社員よりも定時に仕事の終了することの多い公務員のほうがコミュニケーションは良好であった。母親の就業の有無・家族形態については有意差は見られなかったものの、コミュニケーション良好群に母親のフルタイム就業率が高く、不良群ではパート就業が多かった。母親のフルタイム勤務による手の足りない部分を父親が自覚し、積極的に補うことによって父子のコミュニケーションが良くなるためと考えられる<sup>5)</sup>。時間的に融通のきくパートタイム勤務の場合、父親は母親に子どものことをまかせきりにして安心してしまうのかも知れない。

父親自身の子どもへの愛着、育児、教育への関心の程度も大きな要因になると考えられる。コミュニケーションのよくとれている父親は、育児関与、子どもとの接触の頻度は高く、子どもが問題行動を起こしたときは積極的に対処している。また、自己の父親像を「よく話を聞いてくれる人」、「子どもの気持ちをよく理解してくれる人」と答えていた父親が多く、子どもの気持ちを共感して理解しようとしている父親が多かった。それに対して、コミュニケーションのあまりとれていない父親は、育児関与、子どもとの接触頻度は低い。自己の父親像は「一生懸命仕事をする人」「よく叱り厳しい人」と答えていた。

父親の重要な役割のなかに子どもに社会性を身につけさせることがある。このことについて、子どもの叱り方とその理由から考察を試みた。コミュニケーションのよくとれている父親は「話して諭す」という子どもにとって受容的なやさしいタイプであるが、「挨拶をしないとき」に叱ることからわかるように、社会性を身につけさせるという役割を果たそうとしている。コミュニケーションのよくとれていない父親は「感情的に怒鳴る」ことが多く「(親の)いうことを聞かないとき」「人(自分)の嫌がることをしたとき」に叱っている。仕事と家庭を分離する、仕事重視の堅実・厳しいタイプの父親であると同時に自己中心的な社会性にかける心の狭い父親といえる。

約20年前の詫摩氏の調査と比較すると、父親はますます積極的に子どもの育児に参加するようになった。また、望む子ども像に変化がみられた。

今回は、あくまでも父親からみた父子関係をめぐる事柄であった。子ども自身は父子関係をどのようにとらえているのか、また、母親はどのように父子関係を評価し、望んでいるのかを明らかにする必要がある。

### 引用および参考文献

- 1) 「解説日本の父親」(依田 明・小川捷之編『現代のエスプリ・父親』至文堂、1965) 189PP
- 2) 詫摩武俊『父と子のあいだ』(雷鳥社、1969)
- 3) 総務庁青少年対策本部編『日本の父親と子供』(大蔵省印刷局、1987)
- 4) くもん子ども研究所編『父と子のコミュニケーション』(くもん子ども研究所、1991)
- 5) 菅原真理子『新・家族の時代』(中央公論社、1987) 118PP